

(完2、可2)

国立大学法人北陸先端科学技術大学院大学
第125回経営協議会議事要録

日 時 令和8年3月19日(木) 13:00～15:05
場 所 北陸先端科学技術大学院大学 第1・第2会議室 (JAIST国際セミナーハウス1階)
出席者 寺野稔(議長)、永井由佳里、飯田弘之、河野広幸、黒田壽二、細野昭雄、
井熊均、岩澤康裕、金井豊、仲井培雄及び中尾正文の各委員
欠席者 小俣一夫、小原奈津子、馳浩委員
オブザーバー 谷口徹監事、水野一義監事、上原隆平研究科長、丹康雄副学長、小泉周副学
長、永田晃也副学長、西村拓一副研究科長、田中清史副研究科長、大島義文
副研究科長、林幸雄融合科学共同専攻長及び石川県企画振興部企画課高等教
育振興・国際機関連携グループ近藤主事

議事に先立ち、議長から、事前に送付した第123回経営協議会の議事要録(案)及び第124回経営協議会(書面付議)の議事要録(案)について、資料1-1及び1-2に基づき説明があり、原案のとおり承認された。

議 事

<審議事項>

- 1 第4期中期目標・中期計画における令和8年度年度計画について
評価室長から、第4期中期目標・中期計画における令和8年度年度計画について、資料2に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
- 2 令和8年度評価実施計画の策定について
評価室長から、令和8年度評価実施計画の策定について、資料3に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

- 3 令和8年度予算編成について
会計課長から、令和8年度予算編成について、資料4に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
- 4 超データ駆動材料探索センターの設置について
学長から、超データ駆動材料探索センターの設置について、資料5に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
- 5 組織改組について
総務部副部長から、組織改組について、資料6に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。
- 6 学内規則の制定改廃
 - ・学則等の一部改正について
総務課長から、学則等の一部改正について、資料7に基づき説明があり、審議の結果、原案のとおり承認された。

<報告事項>

- 1 令和8年度政府予算案等について
会計課長及び施設管理課長から、令和8年度政府予算案等について、資料8に基づき報告があった。
- 2 令和7年度「産業界等の有識者と学長との懇談会」の開催報告について
学長から、令和7年度「産業界等の有識者と学長との懇談会」の開催報告について、資料9に基づき報告があった。
- 3 令和7年度監事監査結果報告について
谷口監事及び水野監事から、令和7年度監事監査結果報告について、資料10に基づき報告があった。
- 4 令和7年度監事監査における改善すべき事項への対応状況報告について
学長から、令和7年度監事監査における改善すべき事項への対応状況報告について、資料11に基づき報告があった。

5 最近の本学の活動状況について

広報室長から、最近の本学の活動状況について、資料1 2に基づき報告があった。

<意見交換>

1 JAIST未来ビジョンの改訂について

学長から、JAIST未来ビジョンの改訂について、資料1 3に基づき説明があり、その後、意見交換が行われた。

- 基本戦略の4に「経営」が挙げられており、そこでは「教学と経営が明確な役割分担の下で」と記載されている。これは、経営を自前で自律的に担うという、国立大学が法人化された際に文部科学省が掲げた主旨の一つでもある。一方で、一人の学長が教学と経営の双方に卓越しているということは極めて稀である。この記載には、次期学長を選任する際に、将来的には二者による分担体制も想定しているとの意味を含んでいるのか。

⇒教育と経営については、もう少し明確に分けてもよいのではないかと考える。これは、研究業績をしっかりと積み上げて学長になっている者が、必ずしも経営を十分に理解しているとは限らないためである。本来であれば、理事会組織を分け、そこに経営上の責任を持たせることにより、学長には教学に卓越した人物を選任することも可能となる。東京科学大学が一つの大学として発足した際、理事長と学長が分けられたという実績も出てきている。将来的に、そのような方向性に踏み出す可能性もあり得るのではないかと、個人的には考えている。

- この5年間で、北陸における産学連携は大きく変化してきた。その変化を牽引してきたのは、TeSHのような中心となるものを構築してきた先端大であると思っている。また、先日のMatching HUBに参加し、先端大のネットワークを通じた活動が大きくレベルアップしていると実感した。この基本戦略の3に示されている「新たな価値を創出する先進的社會共創システム」はまさに現在構築されつつあり、期待は大きい。ただ、日本の中における先進的社會共創システムという表現だけでは、十分に伝わりにくいと感じる。先端大を中心に、複数の産学連携を組み合わせる立体的に構築してきた独自の共創システムは大きな価値を持っており、その点をより明確に表現できればよいと考える。

⇒先進的な社会共創システムは、その次にある第4世代大学（4GU）のコンセプトでもある。一方で、日本では企業の99.7パーセントが中小企業であり、その多くが地方に所在している。この点において、その地域の大規模大学と大企業が連携することを前提とした欧州型の4GUモデルとは構造が大きく異なっている。そのため当初は、4GUという言葉を用いないことも検討したが、この概念が国際的に広く浸透している現状を踏まえ用

いるべきであるとの意見もあり、そこで日本の実情に即した日本版4GUとして、このコンセプトを展開する形で提案を行っている。また、Matching HUBのような取り組みについては、それ自体を4GUと位置付けるのではなく、従来、先端大が進めてきたことを一段発展させるということを含め「先進的な社会共創システム」としている。ただし、表現が抽象的である点は課題であり、今後は、より具体的なイメージを共有できる表現への修正を検討したいと考えている。

- 4GUの日本における提案・実践大学としての地位を確立するという考え方自体は理解できる。しかし、欧州型の4GUを人口減少やエネルギー制約等を抱える日本にそのまま当てはめることには限界があり、日本国内のみで大学・企業・社会の連携を進めたとしても、それが従来と異なる成果をどこまで生み、日本の将来や国力の向上にどれほど寄与するのかは不透明である。したがって、先端大が提案・実践大学として地位を確立するのであれば、日本版4GUについて概念面・実践面の双方から構築していく必要があり、こうした課題を踏まえ、改善点や指針を明確に示し、国への提案や文部科学省との連携を通じて、中心的役割を担う姿勢を示していくべきである。

⇒欧州において実施されている4GUの動きではなく、日本における大学と産業界をつなぐ新たな形、取り組みを提案・実践するという観点からすると、書きぶりについては手を入れる必要があると考えている。

- 現代社会における人口の減少を見据えた記載がなされているが、その中で、先端大は大学に多くの人材を集めることを目的としているのか、あるいは人口減少が進む日本社会を支える人材の育成を目的としているのか、その方向性をより明確に示した方がよいのではないかと感じる。

⇒確実に后者であり、記載の具体化も検討したい。労働人口の減少を背景に、社会人が学び直し、新たな分野へ再挑戦する人材の循環システムが重要であると考えている。このシステムは既卒者を対象とし、リカレント教育やリスキリングによって能力を高め、同一または別の企業へ再挑戦してもらうことを想定している。これにより、十分な社会経験と問題意識を備えた高度人材を社会に送り出すことが可能となる。もちろん本学に人材を集めることも重要であるが、それはあくまで副次的な位置づけである。

- ビジョンとは、一般的に理想像や長期的な方向性を示すものとして位置づけられると理解している。一方で、ビジョンとして目標を掲げると、現状との差分や課題が明確化され、いつまでに何を行うかという非常にリジッドな計画が立案されがちである。しかし、あくまでこのビジョンは方向性を示すものであり、日々の活動においてその方向性を意識しながら、状況に応じて手を打っていくための指針として位置づける、という理解で差し支え

ないか。

⇒先端大が世界トップの研究大学を目指す、あるいは目指しているという姿勢そのものをご指摘いただいたように方向性を示していると考えている。国際的なイメージが全くないわけではないが、やはり世界トップの研究大学は遠いことから、常に世界トップの研究大学へと我々自身が意識を持って進んでいくという、方向づけが最も重要な点であるとする。

⇒学内では世界トップレベルの研究大学を目指し、ここ数年で1ステップ、2ステップ、3ステップと段階的に向上させていこうという方針のもとでマネジメントを行っている状況である。単に目標を掲げるだけでなく、計画を策定した上で、その戦略に基づいて進めていくため、総合戦略本部のような組織を設置し、体制を整えているところでもある。

- ・先進国の中において日本の科学リテラシーが低い状況を踏まえると、人材育成が不可欠である。例えば、企業において博士後期課程を有する人材は非常に少ない。したがって、先端大には産業界に貢献できる博士人材の育成を進めてもらいたい。これは先端大に限った話ではなく、日本全体として進めるべきであり、そうすることで、科学リテラシーは大きく向上すると考える。

⇒まずは意識改革である。いわゆる偏差値の高い大学ほど、博士後期課程に在籍する学生はアカデミア志向に傾きがちであり、先端大においてもその傾向が見られる。今後は、各大学が産業界をしっかりと主導できる博士人材の育て方について検討していかなければならない。そうでなければ、欧米と技術的に勝負できる企業は育ちにくく、そこで活躍する人材も十分には育成されないと考えられる。我々としては、こうした点について本ビジョンに明記してもよいと考えるほど、特に博士後期課程に重点を置いている。

<その他>

1 議長から、令和8年度経営協議会開催日程に基づき説明があった。

2 次回の開催について

議長から、次回の本協議会の開催を令和8年4月（書面付議）に予定している旨の説明があった。

資料

- 1-1 第123回経営協議会議事要録（案）
- 1-2 第124回経営協議会（書面付議）議事要録（案）
- 2 第4期中期目標・中期計画における令和8年度年度計画について（案）
- 3 令和8年度評価実施計画の策定について（案）
- 4 令和8年度予算編成について
- 5 超データ駆動材料探索センターの設置について
- 6 組織改組について（案）
- 7 北陸先端科学技術大学院大学学則等の一部改正について（案）
- 8 令和8年度 政府予算（案）
- 9 令和7年度「産業界等の有識者と学長との懇談会」の開催報告
- 10 令和7年度 監事監査結果報告書
- 11 令和7年度監事監査における改善すべき事項への対応状況報告書
- 12 最近の本学の活動状況について
- 13 JAIST未来ビジョンBEYOND（案） 世界トップの研究大学を目指して